# 人形を作った人たち

特定非営利活動法人阿波農村舞台の会理事長　大和武生

淡路の人形座では、旅から旅への興業を続けるために人形の傷みも激しく、地方巡業が終わる度に、次の興業に備えて人形の頭を修理したり、新たに製作したりする必要に迫られた。また、興業に失敗して予定していた収入を得られず、人形を抵当にして帰りの旅費を借りたり、座員が病気になって巡業が続けられない時には、病気が直れば人形を廻して稼ぐことができるよう、人形を渡して療養をさせるなど、やむを得ない事情から人形を手放す場合も多くあったという。淡路の人形座に人形を供給し、その全国巡業を支えてきたのが阿波の人形師であった。

また、阿波の人形座の存在も多くの人形師が生まれたことと深く関係している。明治から昭和初期まで活躍した人形師・天狗久の注文帳には、阿波で活躍していた七十二座の人形座から受けた注文が記録されている。これらの座では、多いところでは五十体以上、少ない座でも最低十体ほどの人形は揃えていたと考えられる。さらに、吉野川の中流域の三好市を中心に、明治の初め頃に二百人はいたと言われる箱まわし芸人からも多数の注文を受けていた。

こうした需要に対応するために、阿波は有名無名の人形師を数多く輩出した。「阿波人形師の祖」と呼ばれている馬之背駒蔵の人形は現在十点ほどが残っているが、生没年は不明、活躍した時期も享保年間、宝暦明和年間など諸説がある。宇野千代の小説「人形師天狗屋久吉」で全国的に有名になったのが天狗久、本名は吉岡久吉という。十六歳で人形富の弟子になり十年後に独立、人形の目にガラス玉を入れたり、頭を大型化するなど独創的な仕事をした。天狗久の甥の天狗弁は大正時代に文楽座の座付き人形師としても活躍した。明治四十年に鳴門市に生まれた四代目大江巳之助は、現在文楽座が所有する人形の大半を作り、同座の戦後の復興に大きく貢献した。

阿波の木偶は、淡路の人形座や箱廻し芸人を通じて全国各地へ広がっていったが、こうした人形づくりの伝統は現在までしっかりと引き継がれている。平成十三年には、県内の人形師で組織する「阿波木偶作家協会」が設立され、翌年開催された第一回「現代の木偶展」には、六十六人の人形師が百七十九点の人形頭を出展した。阿波の人形師たちは、今も県内外からの人形の修理や新作の注文に応えている。

寄井座所有の人形頭